

はじめに

「学級崩壊」「いじめ」「不登校」などを始めとする「新しい荒れ」の実像については先月号で紹介した。今回はその原因について、いくつかの観点からの考察を紹介する。

学校の抱える問題

本書では一つの事例として「引きこもり」現象を取りあげ、凶悪事件を起こした若者の多くが「引きこもり体験」を持ち、成績も上位であった点に着目している。

尾木によると「学校とは、学力があがればあがるほど、自分の可能性や幸せを拡大する力を授けてくれるありがたい装置」であった。

しかし、その結果、学歴偏重社会・過酷な学歴競争時代を生み出し、90年代に入って若い大人になった時、自分の居場所を求めてさまよい苦悩する姿が集中的に現れている（青い鳥症候群・バーンアウト・男が多い）と尾木は分析する。

前回の学習指導要領改訂に伴い、幼稚園などでは「子どもの自主性」を尊重する指導方法への変革があり、幼稚園・保育園から小学校への接続の部分で子どもたちはその受ける教育スタイルが大きく変わることになった。

また、改訂に伴い、「新学力観」に基づき、関心・意欲・態度が評価されるようになった。偏差値を重視した教育から一見進んだように見えるが、そうではない。子どもたちは学習のみならず、日常生活のあらゆる部分で「良い子」を演じざるを得ず、先の急激な教育スタイルの変化と合わさって、さらにストレスを増大させているのである。

教師の抱える問題

NHKの世論調査で子どもの望む教師像として、次のようなアンケート結果が出ている。

	中高生	保護者	校長
気楽に話せる	61%	26%	4%
授業がわかりやすい	50%	56%	92%
ユーモアがある	41%	12%	8%
どの生徒にも公平に接する	39%	50%	52%

子どもたちが望むものは決して特殊なものではないが、今、小学校教師の3人に一人が「学級担任をやめたい」と思ったことがあるという実態がある。子どもと教師の間の深い溝は評価の問題と指導の問題に関係している。「学力競争」から「良い子競争」への変革がもたらす、子どものアイデンティティの空洞化を我々は気づいていかなければならない。そして、生徒をがんじがらめに行っている指導を見直し、個性や多様性を発達させるようにいかに支援できるのか自分の指導を見つめ直していかなければならないのである。

家庭の問題・社会の問題

若い親の世代が子育て不全に陥っている傾向、また、子どもをターゲットにした消費主義や子どもの「性」を商品化する社会など、学校の外でも大切な「子ども期」を奪うかのような大人社会が存在する。いわば大人と子どもの関係も致命的な傷を負っており、子どもの大人への不信感も増大している。

「子ども期」はいかにあるべきなのだろうか？尾木は「子ども期」の定義について「独立した人格の主体である子どもが未来の主権者になるために、最前の利益を受け、権利行使をする発達保障期」であるとしている。決して保護するだけでなく、「1才には1才の、15才には15才なりの自分と外界との関わりを通して、自己決定能力を身につけ、それを発揮していく。」のである。

子どもの新たな可能性

子どもを取り巻く諸問題を述べてきたが、子どもたちはどっこいそんな中でも踏ん張っている。確かに不安はつきまとうが、現代の子どもたちは「新しい豊かな感性」を育んでいる。少し前の事例で言えば、阪神大震災時には茶髪のコギャルたちがポケベル片手に人命救助に救援活動に飛び回る大活躍を見せた。のべ120万人のボランティアの大半を若者が占めたことは記憶に新しい。また、薬害エイズ訴訟でも、当時の19才の学生、川田龍平氏を支援する小・中・高生たちは氏のたたかいや問いかけに自らの生き方に重ね合わせて、ラップを踊りパレードしながら、ついに厚生省や製薬会社を謝罪させた。「たたかいの発想やその行動様式など新鮮そのものである」と尾木は見て、全く新しい「感覚」を有した「市民」の登場を感じさせると述べている。

失いつつある「子ども期」を自らダイレクトで社会につながりリカバーしながら、「子ども期」の発達課題を獲得しようとする「小さな市民」としての子どもたちの存在が感じられるのである。